

cafe talk_16

16号の制作に関わったクリエイターと、enocoスタッフによるカフェトーク。
今号をもちまして、カフェトークコーナーは終了となります。今までありがとうございました！



芝野 健太さん（左）デザイナー

1988年大阪府生まれ。2010年立命館大学理工学部建築都市デザイン学科卒業。2012年よりノマルにてグラフィックデザイナーとして所属した後、2016年よりライブアートブックス(大伸社)に所属。印刷設計者の立場から写真集や美術書籍などの制作に携わりながら、デザイナーとしても活動。

飯川 雄大さん（右）美術家

1981年兵庫県生まれ。2002年 成安造形大学造形学部デザイン科 ビデオクラス 卒業。映像、写真、イラストレーションなど様々な分野で活動。2013年からは“衝動”を記録することで欠落する情報に着目する「デコレータークラブ」などを展開している。

- 飯川さんは9号に続き、今回が2回目の登場です。
芝野 飯川さんとは以前、関西在住の10名の美術作家と「辺集 | Collecting Sides」というアートブックを作った時に知り合いました。その時に飯川さんの作品における観察力に惹かれ、今回の撮影をお願いしました。
- 「辺集」とは、いわば「本の上の展覧会」です。150部限定だったのですが、作家はまさしく十人十色。かなり大変だったのですが、芝野さんがいてくださったのでもんとか良い本を発行することができました。
- 芝野さんは以前ギャラリーノマルにいらしたので、アーティストとのやり取りも慣れていらっしゃるのでしょうか？今回の表紙も今村源さんという作家のドローイングです。
- はい、enocoのクリエイティブなネットワークを張り巡らせて地域の地盤を築いていくという活動や姿勢を、目に見えない地中におけるキノコの活動、そして地球環境における役割と重ね合わせ、今村さんの作品をメインに使わせていただきました。後から「エノコ」と「キノコ」が似ていることに気づきましたが(笑)
- これまでのネットワークを今のお仕事に活かす芝野さんの動きもキノコ的かもしれませんね！

[お知らせ]

B1Fのカフェ「ニノーバルコーヒー江之子島店」は、2017年12月24日をもちまして閉店いたしました。
これまでの皆さまのご支援、ご愛顧に心より感謝いたします。



大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]
Enokojima Art, Culture and Creative Center, Osaka
Prefecture

アートやデザインの創造力で、都市を元気にすることを目指し2012年4月にオープン。展示室や多目的室のレンタル事業を行うほか、企画展や公演、セミナー・ワークショップなどを開催し、クリエイティブな人や情報が行き交うプラットフォームとなることを目指しています。

〒550-0006 大阪市西区江之子島2丁目1番34号

開館時間：10:00～21:00(ただし展示室は催しによりオープン時間が異なります)

月曜・年末年始休館

電話 06-6441-8050 | FAX:06-6441-8151

メール art@enokojima-art.jp

www.enokojima-art.jp

enocoニュースレター 16 2018年1月発行

| 発行 | 大阪府立江之子島文化芸術創造センター

| 編集 | 高坂玲子(enoco企画部門)

| 表紙・特集ページデザイン | 芝野健太(ライブアートブックス)

| 表紙ドローイング | 今村源

| 写真(2-5p 座談会) | 飯川雄大

| イラスト(エノケン、似顔絵) | タダユキヒロ

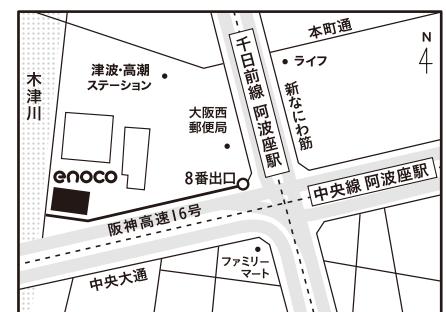
| アートディレクション | 後藤哲也(000 Projects)

| デザイン | 小池一馬(000 Projects)

enocoニュースレターは、enocoが年4回発行する情報誌。

(2017年度は13号14号を合併号とし、年3回の発行となります)

enocoで起こっていることや、enocoにかかる人々が日々考えていることをお伝えしていきます。



[アクセス]

大阪市営地下鉄千日前線・中央線「阿波座駅」下車、8番出口から西へ約150m。徒歩約3分。

enoco 16 特集：大阪↔アート↔ネットワーク



16号の表紙 ドローイング：今村源 デザイン：芝野健太

江之子島文化芸術創造センター/enocoがお送りする「enocoニュースレター」。

表紙と巻頭は、毎号異なる関西のクリエイターたちが担当します。

16号の特集ではさまざまな人や団体が活動する都市・大阪の状況を探ってみます。

目に見える活動だけではなく、見えないところでの人・もの・情報の行き交いが、

街を動かし生かしているのかもしれない、ということを想像させる表紙です。

さて、これは一体…？

今村 源 |ちかのカチ| drawing on paper | 2006

大阪←→アート←→ネットワーク

enocoは府立の文化施設ですが、物理的な空間や場所としてあるだけでなく、文化芸術や創造的な活動によって地域の力を引き出し、ネットワークを築き、地域の基盤をつくるための拠点となることを目指しています。

その先に見据えるのが「文化的コモンズの形成」。

文化的コモンズとは、(財)地域創造の調査研究による定義によると*

「地域の共同体の誰もが自由に参加できる

入会地のような文化的営みの総体」とあります。

enocoが目指す「文化的コモンズ」とはどういうものなのか。

実のところ、まだ手探り状態です。

そのためenocoでは今年度より「ネットワーク」というキーワードを掲げ、まずは大阪という都市における多様な活動に出会いうことから始めていこうとしています。

今回は大阪の状況をよく知る3名のゲストをお招きし、

大阪の現況を伺うとともに、

大阪らしいネットワークのあり方やその可能性を探ります。

(2017年11月18日実施)

*「平成26・27年度 地域における文化・芸術活動を担う人材の育成等に関する調査研究」など

座談会参加者(50音順)

甲賀雅章

enoco館長

佐藤千晴

大阪アーツカウンシル統括責任者

重田龍佑

大阪市立芸術創造館館長

ART COMPLEXディレクター

服部滋樹

graf代表

クリエイティブディレクター

撮影

飯川雄大

美術家

「大阪」のネットワークは今

甲賀 今enocoは、大阪における個々バラバラなものが少しづながら持てる場や営みを形成することの可能性、大阪らしいネットワークのあり方を探ろうとしています。今の大阪は、個々のポテンシャルはあるけれど、一つの街、あるいはかたまりとしてのポテンシャルがあまりないという意見も少し聞きます。そこで今日はみなさんと大阪の今の状況やネットワークのあり方について、ざくばらんに話をしたいと思っています。

江之子島文化芸術創造センター

服部 僕はgrafを立ち上げてからずっとコラボレーション型のものづくりをしています。例えば、大竹(伸朗)さんや草間(彌生)さんといったアーティストとも。そうするとそれぞれの仲間や知らないかった世界の人たちが組み合わさることになります。それがどんどん広がりを見せ、それぞれの専門性が人を呼び込む装置に変わり、新たな出会いが生まれていきます。今、SNSでも同じことが起こっている気がします。ものづくりから外に開くということを自由にできる人が増えている。規模の問題ではなく価値観の問題で、フラットにさまざまなコミュニティにアクセスできるようになっている。僕は地方の自治体の仕事も多いのですが、行政の施策でも大きなメディアではなく、コミュニティ論的な発信手法が必要とされているなと思います。

graf(撮影:下村康典)

重田 芸術創造館(以下、芸創)はenoco同様、指定管理者制度で民間の会社からなる事業体が運営しています。そして大阪にあるほぼ唯一の公立の演劇・音楽・ダンスに特化した、練習と発表支援の施設です。この支援という点で今、力を入れているのが拠点づくり。ただアーティストがお金を払って借りて練習するレンタル施設ではなく、人が集まることでネットワークやコミュニティづくりをする手助けをする、アートに関するインフラ整備のようなことがパブリックな施設の役割だと考え、活動しています。自主事業では「ワークショップフェスティバルDOORS」という企画を毎年開催しています。大阪って様々なものが他の街以上にあるけれど、どれが大阪らしいのかと問われると、一言で言えないというのが大阪らしさなのでは?と

いうことを起点に、様々な活動を見本市のように一堂に集め、紹介することにしました。またSNSやインターネットによって一般の人が情報を取りやすい世の中になる一方、知らないものに出会うチャンスがなくなってきたています。そこで500円均一で90分という安い・短い時間で体験してもらうことで、アーティストとお客様の出会いの場となればと、これも環境整備とかインフラづくりの一環と思ってやっています。

甲賀 佐藤さんは大阪アーツカウンシルの統括責任者として、大阪の文化施設・活動の現況をどう見られていますか?

佐藤 ジャンル間の交流がほとんどないと感じますね。それぞれの業界の中では交流があるけれど他ではない。それに好奇心の方向が狭くなっている。また地域の話でいうと、府立の劇場やホールはないけれども、府域の自治体は市立の文化ホール・会館を持っているんですよ。でも地域の中での連携はあるけれど、他地域との交流がなく、お互いの事業を知らない。ジャンル、地域、もしかすると世代ごとの分断も進んでいるのかもしれないと思います。

服部 文化事業自体の予算も少なくなっているから、そうなると考えるのは「効率性」。効率性優先になるとボーダーを渡らない・渡れないですもんね。

佐藤 例えば河内長野では、サキタハジメさんというのこぎり演奏家で作曲家の方が「奥河内音絵巻」と称して、彼の持っている様々な音楽のリソース、例えばちんどん音楽や地元の芸能であるだんじり囃子などを生かした舞台を作っています。こういった取り組みが他地域にも伝わればいいのですが。大阪府が府内で地域に根付いてしっかりと活動している

「ワークショップフェスティバルDOORS」

重田 龍佑

ホールが集まり、情報共有する機会を用意してもいいかもしれません。

服部 僕も今、河内長野の林業支援をやっているんですが、サキタくんに巻き込まれて、河内長野の木材でオリジナルの楽器を作ったりしました。サキタハジメっていう人のハブで交流が生まれている。場も大事だと思うのですが、そこにどういう登場人物がいるかによって変わりますもんね。



服部滋樹

顔の見える「広報」

重田 人の力が大事である一方、他がやっていることって情報としてなかなか伝わってこないんですよね。SNSなど発信するべき先が多くなりすぎて、労力はかかるものの何も響いて返ってこない、と現場は疲弊しています。それに、情報が載ることだけでは意味をなさなくなっています。結局情報が氾濫し、なおかつ広告というものにものすごく警戒する世の中にになっていると思うんですよ。SNSで口コミかと思ったら実は広告記事だったということもあるし、みんな広告に引っかかりたくない。自分の時間、例えば週末の1日を使うという時に、できれば面白いものを見に行きたい、ハズレを引きたくないと思った時に、情報がたくさんあるからこそ、どれが面白いのかわからなくて困るという状況になっている気がします。



佐藤 とはいえ、あんまり臆病になっちゃうと面白いものに出会えないから、どこにどう嗅覚を働かせるかというのはとても大切ですね。あとは、メディアを新たに作ろうというよりも、それぞれが発信するパワーを身につけられる支援が必要かもしれません。

服部 「広報」ではなく「広報」ですね。広報というのは、見事に抽出した言語で端的に表すんだけど、それよりも誰がどんな思いで作っているのか、どんな素材なのかっていうことの方が僕らは知りたいじゃないですか。広報にはあまり引っかかるない、騙されたくないという思いが強いから拒否反応を起こす。となったら大事なのは「広報」。でも広報をするには広報の専門家がチームに関わらないと客観視できない。なのでタッグを組める人を自分たちの領域の中に引き込むことが必要になってくると思います。

甲賀 まさにgrafはそうですね。grafという存在自体がコモンズになっていて、そこには食があり職人さんがいたり、いろんな情報があって、みんなが自由にカフェの中に入り出でて、みんなそこでいろんな情報を拾ったりしていますね。

服部 grafでインフォメーションセンターだったらしいんかな?それはハードル高いか…

graf撮影:下村康典)

佐藤 grafはgrafでセレクトしたインフォメーションセンターとしてあればいいかもしれない。網羅するとこぼれちゃう情報があるので。服部さんのところに行ったら「これが面白いよ」と言われるけど、甲賀さんのところに行ったら「あれが面白いよ」とまた違う情報があるという、ファッショントレンドにおけるセレクトショップのような場所がいくつかあって、「私が面白いと思うのは、多分誰々推しのものだな」というようになれば。

甲賀 百貨店じゃダメってことでしょう?

佐藤 なんもあるというのは、何にもわからないとなってしまいがちなのでね。

重田 チェーン店が広まって、個人店舗を駆逐して行った反面、今までセレクトされた小さいお店の方に興味が移っていくって。どこに行つても同じものがあって、どこでも安心して同じクオリティのものが買えるというのがチェーン店の良さだったけれど、どこでも同じものしかないから面白くない。セレクトされたものが自分の好みに合えば、そこに行きたいというようになってしまいますね。

服部 芸術は役割でいうと全部網羅しないといけないだろうから、中には選ぶ人の顔が見えきたりいいように思います。

佐藤 それが公立文化施設ではなかなか難しいところなんですね。

大阪市立
芸術創造館

服部 わかります。ただ、そこで働いている人がいて、その人たちの顔が見えないというのは残念だなとも思います。公共施設でも顔が見えるべきですね。多分grafもそうで、「grafにいる誰々」というようになった方がいい。そういう人格の集まりみたいに場や組織がなっていらっしゃるのに思います。もしくは自分がどの役割を持っているかということを「係」ということで役割を持たせるとか。例えば絵を描くのが得意だから「絵を描く係」というように。個性が見えないからアクセスしようがないわけで、個性が見えれば公共的な場所でも親しみを持つことができると思います。

服部 例えばある店にいると、伝書鳩のように隣町から酔っ払った人が帰ってきて「向こうの店でこんな人集まってるよ」「えーじゃあちょっと行ってこよかな」というようなやりとりがないんですよね。

佐藤 みんなそういう飲み方しなくなりましたね。

甲賀 世代や時代もあるかもしれないですね。今、混沌という話がありました。僕は今の状況が混沌だと思ってたんです。個々がポテンシャルを持っているんだけど交わることもなく、ただみんな悶々としている、という意味での混沌。でも今服部さんが言われた混沌っていうのは、それとは違う。それこそ大阪っぽいですよね。

重田 今は個々にある、分断された混沌ですもんね。

甲賀 顔や個性が見えてくるとして、次にそういった施設や団体、アーティストやクリエイターなどと、大阪らしいネットワークをどう形成していくことができるのでしょうか。

服部 以前は大阪にも、そこにカメラマンもいれば編集者もいればデザイナーもいれば建築家もいれば劇団の人もいる、というようなバーなどがあったと思うんですよ。それをサロンと呼ぶならば、そんな場所での交流が大阪は多かったはずなんです。でもある種、大阪は整理されすぎて、そういう人が集まることのできる隙間がなくなったように思います。混沌とした状態

が大阪だ、と言えなくなってきた。さっきのジャンル間の分断という話もそういう場での交流がなくなったからだと思うんです。

重田 僕は京都出身ですが、大阪に来た時、大阪ってすごい広い街だと思ったんですよ。京都の方がいい意味でも悪い意味でも狭くて、繁華街を歩いていると知り合いによく会うんですよ。あの辺に集まっているよね、という暗黙の領域みたいなのがあったりする。それに比べると大阪はすごく広くて、それぞれ街ごとに人は集まっているんですけど、横断して人が行き交いしているように感じにくいです。

服部 例えある店にいると、伝書鳩のように隣町から酔っ払った人が帰ってきて「向こうの店でこんな人集まってるよ」「えーじゃあちょっと行ってこよかな」というようなやりとりがないんですよね。

佐藤 みんなそういう飲み方しなくなりましたね。

甲賀 世代や時代もあるかもしれないですね。今、混沌という話がありました。僕は今の状況が混沌だと思ってたんです。個々がポテンシャルを持っているんだけど交わることもなく、ただみんな悶々としている、という意味での混沌。でも今服部さんが言われた混沌っていうのは、それとは違う。それこそ大阪っぽいですよね。

重田 今は個々にある、分断された混沌ですもんね。

佐藤 例えばこの4人が次に会うときに、お互いに思いも寄らない友人を連れて来る、そして8人で話をするというところからスタートして、今度はまたその友達がまた思いも寄らない人

が大阪だ、と言えなくなってきた。さっきのジャンル間の分断という話もそういう場での交流がなくなったからだと思うんです。

を連れて来て増えていく…そういう仕掛けを作らないと、交わりを持つための最初のコアもできないかもしれませんですね。

甲賀 それも場所変えていってできればいいよね。いつも同じ場所でなくて、持ち回りしていった方が多分、緩やかなコモンズ的なものができるのではないかと。

佐藤 今日、北加賀屋に行っていたんですが、大阪府・市でやっている芸術文化魅力育成プロジェクトという事業の一環で「いい場の作り方」というトークイベントがあったんです。ギャラリーと音楽スペースをやっている大阪の若手2人が、名古屋と高松で面白い場をつくっている人を呼んできました。どちらも本屋なんです。期せずして2人もいろんな人たちが集まる窓口として書店がやりたかったと言いました。今は飲み屋ではなく、ギャラリーや書店なんだな。お酒が飲める書店というのもありますね。

「いい場の作り方」

重田 (阿倍野区)の文の里というところで、元々演劇やダンスをされていた方が「居留守文庫」っていう古書店を始められて、最初は自分でセレクトした本を扱っていたんですが、文の里商店街から空き店舗があるからそこでも何かやってくれないかとなって。それで店に本棚を作り、本を置きたい人を集め一箱ずつ貸し出し一箱店主になってもらうという「みづばち古書部」という新スペースを始めたんです。一軒の店ほどセレクトはできなくても一箱だけ自分の好きなものを集めて紹介したい、という人がいるんじゃないいかということでやたらすぐに埋まっちゃって。あえて場を作りましょう、集めましょうということではなく、自然に人が集まる仕掛けみたいになっています。

みづばち古書部

佐藤千晴
大阪アーツカウンシル統括責任者

1962年東京生まれ。早稲田大学第一文学部社会学専修卒。85年に朝日新聞社に入社、徳島支局を振り出しに大阪本社学芸部(現・生活文化部)などに勤務。途中96年から2001年まで東京本社学芸部・電子波電波メディア局勤務だが、記者活動のベースは大阪。文化、特にクラシック音楽や宝塚歌劇がメインフィールドだった。2013年4月に退社し、同年6月、大阪アーツカウンシル統括責任者に就任。



服部 最近、本はアプリケーションになっていますね。

佐藤 人々のカルチャーへのアクセスや参加の窓口というのが、単に消費するだけではなく、ワークショップで教える、あるいは本屋で本を買うだけでなく一箱運営するというような、一步踏み出した関わりになってくれば、また新しい可能性が拓けるかなとも思います。

甲賀 まずは4人で4×3飲み会からでしょうか。1人が3人まで誰かを連れてくる。例えば食べ物・飲み物はすべて持ち込みで。enocoも「こたつ会議」という持ち込みの交流会をやったことがあるんですが、持ち込みでやると盛り上がりります。コモンズに参加する条件として、自分のセレクトをみんなで持ち寄る。そんなゆるい混沌から始めてみることが大切かもしれませんね。

佐藤 この日にgrafに行ったら服部さんがいるよ、この日にenocoに来たら甲賀さんがいる

重田龍佑
大阪市立芸術創造館館長/ART COMPLEXディレクター
1978年京都生まれ。「アートを切口に新しい価値観を創造する」をテーマに、ARTCOMPLEXグループのディレクターとして数多くのアートイベントのディレクションを務める。舞台監督・舞台美術・照明などで多くの劇団やダンスカンパニーに携わった経験を活かし、複数の劇場・文化施設の運営や企画製作、若手アーティストの支援・育成や民間・公共劇場間の連携など、文化芸術を取り巻く環境づくりにも積極的に取り組んでいる。

服部滋樹
graf代表/クリエイティブディレクター
1970年大阪生まれ。美大で彫刻を学んだ後、インテリアショップ、デザイン会社勤務を経て、1998年にインテリアショップで出会った友人たちとgrafを立ち上げる。建築、インテリアなどに携わった経験を活かし、複数の劇場・文化施設の運営や企画製作、若手アーティストの支援・育成や民間・公共劇場間の連携など、文化芸術を取り巻く環境づくりにも積極的に取り組んでいる。

こたつ会議



「これから」のイベント情報

coming events

パブリック・リデザイン シンポジウム 「クリエイターが手がける行政のデザイン」



市町村をはじめ市民サービスを提供する公的機関からは、日々大量の情報が発信され、数え切れないくらいのチラシやポスターなどがつくられています。しかしその制作にプロのデザイナーがどのくらい関わっているかというと、まだまだ限られているのが現状と言わざるを得ません。

生活にとって重要な情報を社会に向けて効果的に発信し、必要とする人々に的確に届けるためには、グラフィックデザイナーをはじめとするクリエイターの職能がもっと活用されてよいはずです。

そこでenocoでは、関西で活躍するクリエイターと地方自治体をマッチングして、実際の業務でデザイン制作に取り組む「パブリック・リデザイン」を、昨年度からスタートさせました。今年度はJAGDA OSAKAとの共催で、大阪府内各市町村30件の応募の中から、3つのプロジェクトについてデザインを進めてきました。

本シンポジウムはその成果を紹介すると共に、そのプロセスを振り返ることで行政とデザインの関係を問い合わせ直し、これからの公共のデザインを変えていくきっかけとします。

日時 2018年2月10日(土)14:00~16:00(13:30開場)

会場 enoco 1Fルーム4

定員 60名程度(当日先着順受付)

参加費 無料

登壇者 佐藤 大介(sato design.)+河内長野市 総合政策部 広報広聴課、樋口 寛人(mineral)+大東市 街づくり部 交通対策課、森 夕里子(ni-moc)+岸和田市 まちづくり推進部 都市計画課

進行 増永 明子(マスナガデザイン部)
高岡 伸一(enoco企画部門チーフディレクター)

主催 江之子島文化芸術創造センター(enoco)

共催 日本グラフィックデザイナー協会大阪地区
(JAGDA OSAKA)

各イベントの詳細・申し込み方法はWebサイトをご覧ください。 www.enokojima-art.jp

Osaka Creative Forum 2017 「まちを再生する新たなシナリオづくり」



都市整備や市民協働、防災等、さまざまな分野において、多様な立場の組織や人が集まってプラットフォームを形成し、対等な立場で交流・対話をを行い、アートやデザインを手法として、共に課題の検討や事業を推進するための支援を行う「プラットフォーム形成支援事業」。この事業を知っていただくとともに、手法としての有効性をより深く議論するため、斬新な実践や考え方で大きな注目を集めれるゲストをお迎えし、第5回「Osaka Creative Forum」を開催します。

2017年度は、「まちを再生する新たなシナリオづくり」と題し、タクティカル・アーバニズムや海外の先進的なパブリックスペースにおける戦略的な取り組み事例、また、都市へ新たな視点を投げかけるアート等の事例を通して、都市再生の骨太なシナリオづくりについて議論を進めていきます。

アート、コミュニティ・デザイン、建築、まちづくり等に興味のある方々など、広くご参加ください。

—

日時 2018年2月16日(金)18:30~21:00(18:00開場)

会場 朝日生命ホール(大阪市中央区高麗橋4丁目2番16号 大阪朝日生命館8階)

定員 300名(要事前申込)

資料代 500円

登壇者 西野 達(アーティスト)、太田 浩史(株式会社ヌーブル)、山下 裕子(ひと・ネットワーククリエイター/広場ニスト)、泉山 墓威(タクティカル・アーバニスト/東京大学先端科学技術研究センター助教/ソトノバ編集長ほか)、忽那 裕樹(enocoプラットフォーム部門チーフディレクター/ランドスケープデザイナー/E-DESIGN代表)

主催 大阪府

共催 江之子島文化芸術創造センター(enoco)

協力 大阪ガス株式会社

アーティスト・サポート・プログラム enoco [study?] #5 入選アーティスト決定



「社会や他者との関わりを通して、アートの可能性を拓(ひら)くこと」をテーマに、若手アーティストの制作活動と発表のサポートを行うプログラム enoco [study?]。5回目となる今回は、前川紘士さんを入選アーティストとして決定いたしました。

入選した前川紘士さんは、これまで様々な領域や環境で、他者との関わり合いの中で企画を立ち上げ、実践するといった活動をされています。今回のプランは、それらにまつわる資料を整理・再編集しながら、enoco という新たな軸も加えつつ、自身の過去・現在の仕事を社会にひらき拡張し更新していくというものです。様々な環境で遂行されるプロジェクトの現場がある中で、作家だけでなくそれに関わる多様な人々が、そのプロセスの中で抱く課題や思いを再考する機会となるのではないかと思います。本プログラムは、約3ヶ月という長くもなく、短くもない期間であるからこそできる実験と実践の場でもあります。これから3月までの間に、作家の持つ文脈とenocoの持つ文脈、また他者の文脈をリンクさせることにより、どのような形にアウトプットできるかはまだ未知数ですが、共にstudy しながら取り組んでいくことができればと思っています。今後の展開にご期待ください。

—

○今後のスケジュール(予定)

・制作期間:2017年12月~2018年3月(制作期間中、アトリエ公開を予定)。

・中間レビュー:2018年2月

・成果発表:2018年3月下旬

※スケジュールは変更となる場合があります。日程などの詳細・プロジェクトの進捗は、随時、WebやSNSなどでお知らせしていきます。

【enocoの学校】第5期ソーシャルデザイン入門コース 公開プレゼンテーション



enocoでは2013年から講義シリーズ「enocoの学校」を開催しています。

「enocoの学校」は、既成概念にとらわれない自由で柔軟、かつ創造性豊かな発想や思考を学び、社会課題に取り組む人を育てることを目的としています。

関西内外から多彩な講師陣を迎えての講義・ワークショップのほか、フィールドワークや受講生間での自主ワークショップを重ねながら、受講生がチームを作り約半年間でチームごとの企画を練り上げ、一般公開のプレゼンテーションに挑みます。

今年度は学びをさらに深めることのできる「えのこゼミナール」を開設し、アイデアの解像度を上げる思考法と、会議をデザインするファシリテーション法をワークショップ形式で学びました。

公開プレゼンテーションでは第一線で活躍されているゲストクリエイターをお迎えして、提案だけにとどまらずプロジェクト化できるアイデアの提示を目指します。

—

日時 2018年3月24日(土) 15:00~18:00

場所 フラッグスタジオ(enoco北隣タワーマンション1F)

定員 50名(当日先着順受付)

参加費 無料

エキシビションカレンダー 2018年1月 - 4月

exhibition calendar

月	会期	時間	展覧会名	ルーム
1	9(火) - 14(日)	10-18(日曜10-16)	第4回松の木会写真展	[ルーム1]
12(金) - 28(日)	11-19(日曜も含め)	大阪府20世紀美術コレクション 浅野竹二展 一名所版画 郷愁の京・大阪／自由版画 童心と詩情－	[ルーム4]	
1	23(火) - 28(日)	11-18(日曜11-16)	大阪成蹊大学芸術学部美術コース表現教育コース4年生展	[ルーム1]
30(火) - 2/4(日)	11-19(日曜11-15)	TRANS NATIONAL ART 2018	[ルーム1,2]	
30(火) - 2/4(日)	11-19(日曜11-15)	辰巳義隆展	[ルーム3]	
6(火) - 11(日)	未定	Portrait Session in Osaka 10th	[ルーム1]	
13(火) - 18(日)	未定	サカナヘンノヒトタチ展	[ルーム4]	
2	20(火) - 25(日)	未定	第26回近畿大学文芸学部芸術学科造形芸術専攻卒業制作展	[ルーム1,2,3]
24(土) - 3/11(日)	11-19(日曜は最終日のみ11-17)	NISHINARI YOSIO	[ルーム4]	
27(火) - 3/4(日)	11-18(日曜11-16)	左脳がキシム	[ルーム2]	
3	※展覧会の予定はありません(2月下旬から継続して開催しているもの除く)			
10(火) - 15(日)	未定	糸井洋一展	[ルーム2]	
4	10(火) - 15(日)	10-20(日曜10-16)	写真展～永遠～	[ルーム4(A)]
17(火) - 22(日)	未定	福井孝司の水彩画教室展	[ルーム4(B)]	

くわしくはWebサイトをご覧ください <http://www.enokojima-art.jp/>

PICK UP

大阪府20世紀美術コレクション 浅野竹二展 一名所版画 郷愁の京・大阪／自由版画 童心と詩情－

戦後京都を中心に関西で活躍した木版画家 浅野竹二の展覧会を開催します。今回は、1931年から1972年にかけて日本各地の名所や行事などを題材として描いた「名所絵版画シリーズ」の中から、大阪と京都の名所を描いた作品と、1950年頃から手がけた自由版画をご覧いただけます。会期中の週末には子供を対象とした対話型鑑賞イベントと、大人向けのギャラリートークを開催します。子供も大人も楽しめる浅野竹二展、ぜひみなさんお越しください。

会期 | 2018年1月12日(金)～28日(日)

※月曜日休館 11:00～19:00

会場 | enoco 1F ルーム4

入場料 | 無料

イベント | ギャラリートーク

日時:1月20日(土) 14:00～15:00

講師:大阪府府民文化部文化課研究員 中塚宏行

参加無料／事前申込不要



浅野竹二《鶴》
1975年、木版・紙

対話型鑑賞「みんなで竹二さんの作品とおしゃべりしよう！」

日時:1月13日(土)、28日(日) 両日共14:00～15:30

対象:小学生 参加無料／事前申込不要

進行:大阪成蹊大学芸術学部表現教育コース2年生

レビュー review

20世紀の写真芸術 「学生がつくる大阪新美術館・enocoのコレクション展」

(2017年11月22日～12月16日)

待ち望んでいたコレクション展。しかも学生が所蔵品の中から作品を選んだという。

「20世紀の写真芸術」展は、大阪府と大阪市が所蔵する写真コレクションを5つのテーマに沿って紹介する展覧会だ。両館が持つ貴重なコレクション100点あまりが展示されるとあり、開催前から楽しみにしていた人も多い。一番の特徴は、展覧会を学生と学芸員が一緒につくるということ。公募で集まった学生は、学芸員のサポートを受けながら、作品選びから展示プランの検討、展示作業やイベントの企画まで、一連の流れを学ぶ。参加した学生が本当に羨ましい。

章ごとに区切られた会場には、作品が贅沢に並ぶ。写真史に名を刻む著名な欧米作家から、戦前戦後の関西写真界を代表する写真家、1990年に開催された「花博写真美術館」のコレクションなど、府と市が持つ特徴的なコレクションは見応え充分だ。同時に、そこに新鮮味が加わっているのは、学生の視点が入っているからだろう。専門家の選び方と異なる角度から「こういうのがあるよ」と写真の楽しみ方を提示してくれる。展覧会づくりの醍醐味のひとつに作品選びがある。学生にとっても貴重な経験だったに違いない。

現在、大阪市は中之島に新しい美術館の開館準備を進めている。そのタイミングで府と市が共同で事業を企画した意味は大きい。また、今回、若い世代の来館者も多かったという。大阪の充実したコレクションに若い世代が光を当て、その魅力を同世代にも伝える。ここにコレクション展の大きな可能性を感じるとともに、作品を未来につなぐ「場」としての美術館やアートセンターの役割に今後も期待したい。

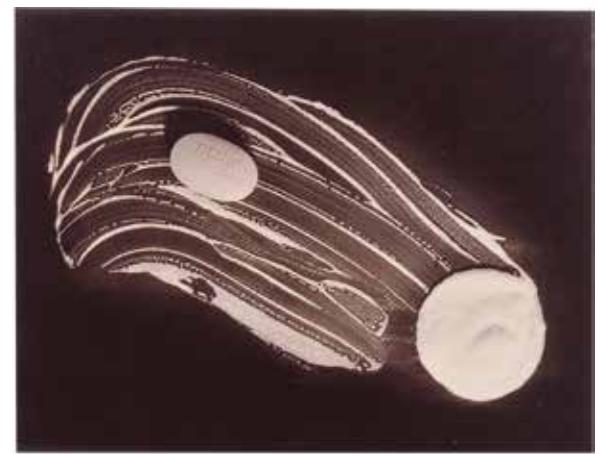
余談になるが、第5章で紹介された岩宮武二がずっと気になっている。もちろん面識はない。ただ、彼が晩年構えた事務所と私の運営するギャラリーが同じ住所という縁はある。今回、展示会場で実際に作品を見たことで胸が高まる。私ならどのように岩宮武二の作品を紹介するだろう。

窪山洋子

ブルームギャラリー主宰、ギャラリスト。2009年、淀川区新北野に写真専門ギャラリーを設立。これまで120回以上の展覧会を開催。近年は同時代の西日本ゆかりの作家を積極的に紹介するとともに、文化資源としての地域の写真や作家活動のアーカイブなど、他分野の専門家と協力しながら、写真を残す活動を行っている。



展示風景



小石清《クラブ石鹼》

1931年
ゼラチンシルバープリント
大阪新美術館建設準備室蔵



「これまで」のイベント情報 past events

豊能町シティ・プロモーションの支援

市町村等の課題解決をサポートする「プラットフォーム形成支援事業」。今年度は、その取組の一つとして、豊能町を支援しています。豊能町は、昨年度に「シティプロモーションプラン」を策定し、豊能町の魅力の再確認や、地域内外の人の豊能町への思いを醸成し、ファンを増やす取組みを進めています。

そこで、プラットフォーム形成支援事業では、豊能町の「当たり前の日常」を楽しみながら発見し、ポータルサイトを通じて情報発信を行う『トヨノノレポーター』を育成することで、町の魅力を発掘・発信するとともに、町を愛する人を増やす計画を実施しています。

レポーターの募集人数30名に対し10代から80代の50名を超える申し込みがありましたが、応募された方の意識が高く、やる気に満ちている方ばかりでしたので、全ての方に『トヨノノレポーター』として活動していただきました。

2017年9月から2018年3月にかけて行われる計8回の講座の受講後、正式に『トヨノノレポーター』となります。講座では、シティ・プロモーションやプランディングとは何かといった、今後の活動に必要な基礎知識から取材方法や文章の書き方、携帯電話で写真を上手に撮るコツなど、レポートのための技術を学んでいただいている。本格的な活動は来年度からとなりますが、受講者の方には、Instagramを通じて豊能町の日常の魅力や講座の様子を発信していただいているので、ハッシュタグ #トヨノノレポーター をご覧ください。

石塚育代／enocoプラットフォーム部門



えのこじま凸凹ラジオ。DJ全員集合イベント「ラジオの日」はじめました。

江之子島(の2丁目付近)だけで聴くことのできる、ちいさなラジオ局"えのこじま凸凹ラジオ"。みんなでつくる、みんなでつかう、みんなのラジオ。をモットーに、enoco サポーターを中心に、現在3本のレギュラー番組をenocoとenocoのお隣のフラッグスタジオで放送しています。

普段はバラバラに活動している凸凹ラジオDJたちですが、月に1度一緒に活動しよう!という思いから、この春より一日中生放送をする「ラジオの日」というイベントを企画(もちろん全てサポーターの自主企画)、これまで4度開催しました。テーマを設けて番組放送を行う日もあれば、ラジオスタジオに遊びに来てくれたお客様をインタビューしたりと、enocoのご近所さん、enocoに来られたクリエイターや来館者などを巻き込みながら進む生放送は、通常の番組放送をしている時には起こらない思わぬコラボ話が生まれたりと、様々な人が行き交う生きた場となっています。次回は2018年2月3日(土)に開催予定。テーマは「美術館と学芸員」。どんな話が展開されるかは、その場でぜひ目撃(視聴?)してください。

レギュラー番組とDJ

夢をかなえる おかねのはなし/DJ:ねこまね、メトロン

チョビヒゲさんのアートな散歩/DJ:チョビヒゲ、ねこまね

ぼうさいラジオ(仮)/DJ:西くん

吉原和音／enoco企画部門



enocoのそだん[eno so done!]フォーラム

シティプロモーションにおけるネットの活用

～効果的な情報発信のために知っておくべきこと～

2017年12月6日開催

2017年度のenocoのそだん[eno so done!]では、毎月実施している個別相談に加えて、近年多くの市町村が熱心に取り組んでいる「シティプロモーション」、とりわけFacebookやTwitter、InstagramといったSNSの活用をテーマにしたフォーラムを開催しました。

講師には株式会社 Geolocation Technologyの代表取締役社長であり、インターネットテクノロジーに詳しい山本敬介氏をお招きし、自治体のSNS活用の課題を整理いただいた上で、ネット技術だからこそ可能な活用方法について、実例を交えながらレクチャーしていただきました。ともすればフォロワー数や「いいね」の獲得拡大に注力しがちなSNSですが、何より取り組むべきはそのアクセス情報の分析と活用であるという、これまで自治体が見落としていた重要なポイントを学びました。どういう属性の組織や個人がWEBページにアクセスしたのかを定量的に把握することで、発信の内容と方法が改善され、より効率的・効果的な情報発信が可能になっていきます。山本氏の会社が開発したIPアドレスを用いた位置情報分析技術はその最たるもので、自治体のシティプロモーションにおいても強力なツールとなることがよくわかりました。

その後enoco館長の甲賀雅章による進行のもと、山本氏と大阪府府民文化部の寺浦薫氏、そして会場を交えたディスカッションが行われ、双方コミュニケーションツールのはずなのに一方通行の情報発信にとどまっている、投稿の度に上司の決裁が必要で迅速性がない、「広く誰にでも」が優先されてターゲットを絞り込めない、といった、自治体ならではの課題が共有されました。参加者は若手の市町村職員が中心でしたが、決裁権をもった管理職の方にも是非参加いただきたい内容でした。

enocoでは3月まで、地域や社会の課題に個別に相談に応じる「eno so done!」を実施しています。ぜひご活用ください(詳細はWebサイトにて)。

高岡伸一／enoco企画部門





enocoのひとびと people



会社の健康診断を忙しさにまかれて忘っていたのですが、5年ぶりに行なったところ自分の体形の変化にびっくり!“ちょっと太ったな。”と思っていたけど、8kgも増えています…。日々の蓄積で徐々に増えているという実感が全くなかったのです。(プラットフォーム部門 石塚育代)

enoco
column
15
妄想する
enocoを見ながら
川向かい

昨年の夏、enocoの川向いの水辺に自宅兼事務所を構えた。我が家リビングから、事務所から、enocoを24時間見つめている(怖い?!).秋の夕焼けにタイルが輝く姿を見ては「よくぞこのアールを残してくれた!」と誇らしく、師走の夜、壁面に模様が映し出されれば「クリスマスイベントかな」と子どもと一緒にどきどきする日々だ。

かつて大阪府に橋下知事が着任し、次々とハコモノ公共施設にメスがいられる中で、新設の公共施設として唯一生き残ったのがenocoの計画。アートのチカラでまちの課題も解決する、新しい文化芸術拠点として誕生した。当時、大阪府の職員として若干ながら企画に関わらせていただき、今は偶然にも川向いに住んでいる。つまり私にとってenocoは、「生まれる前から知っている近所の子」な

のである。

誰にでも等しく「関わってつながる」チャンスが与えられているから、まちは素敵だ。さらに大阪のまちは、「何かやってみたい」と思っている人に寛容なところが最大の魅力。実は、自宅兼事務所も『川口お旅所』と銘打って、まちと人のつながりを生む拠点にしていくと企んでいる。川口再開発地化計画とか言ってみたら、何かやりたい人が集まってくるかもと妄想は膨らむ。まちで勝手に活動する人が増えれば、この界隈ももっと楽しくなるに違いない。噂によると、地域で活動する人々のネットワーク『えのこクラブ(仮)』を立ち上げるそうな。せっかく木津川をはさんでお隣同志。まずは長~い水上糸電話でもしてみるとからつながってみませんか?(笑) enocoとともに、わくわくするまちを!

杉本 容子

(株)ワイヤー・ラボ代表取締役/都市魅力プランナー

社の都仙台生まれ、白砂青松南育ち、水都大阪に生きるまちづくり好き。

水辺やまちの魅力づくりを得意とし、NPO活動にも積極的に参加。民間特別任用により大阪府都市魅力創造局立ち上げ時の企画担当経験をもつ。現在は一児の母とまちづくりコンサルタントの二足の草鞋で奮闘中。大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士後期課程修了。工学博士。

モノ好き館長の 四方山話。

Vol.1

革新的であり、
実用的であり、
そして何より美しい

「Swell 社の ボトル」

ハッキリ言って、僕は「モノ好き」である。まだ数寄者の域には達していないが。変わった?いや、僕にとっては魅力的な物、者、ものを紹介していきたいと思う。

僕は、エコロジストではない。勿論、環境保護には関心があるが、日々の行動は、決してそう呼べるものではない。社会問題に意識の高いスタバなどで購入すれば、マイボトル割引をしてくれるが、コンビニの場合は一度カップにおとした珈琲を入れ替えるのだ。実に無駄なことをしているし、面倒くさい。では、何故持ち歩くのか。僕は、マイボトルを持ち歩くのではなく、Swell社のしかも、この柄のものを持ち歩いているのだ。飽きっぽい僕がほぼ毎日、2年も持ち歩いている。WebサイトによればNYが発祥。環境保全の視点からペットボトルの使用を減らすことを目的に設立されたらしい。僕にとっては、あまり関係がない。

では何故、僕はこのボトルにはまっているのか。先ずは、従来のボトルとは一線を画すスタイリッシュな



表情。しかも環境に優しいとかいう社会メッセージは、このデザインからは伝わってこない。そこが良いのである。2番目に、豊富な色と柄である。そして、Swellからチョークインクペンが販売されているので自分だけのオリジナルボトルも作ってしまう。

次に機能性である。このボトルは、実に優秀だ。

保温性、保冷性も全く問題ない。

飲み口のサイズ、形状も実に考えられている。飲み

やすいし味わいも深い。そして自転車のボトルホルダーに丁度収まるサイズである。自転車が日常の足である僕にとっては、何より嬉しい。

僕は、こいつを、こよなく愛し、海外に行く時も必ず一緒である。

どの店に行っても、「初めて見ました。カッコいい。可愛い!」

モノ好きにはたまらないのですよ、その一言が。



この1月から、いよいよ今年度の「コレクション・キャラバン」がスタート。大阪府20世紀美術コレクションと共にenocoスタッフが大阪府内の小、中学校にお邪魔します!今年はどんな出会いがあるのか(めちゃくちゃ緊張しつつも)とっても楽しみなプログラムです。(企画部門 高橋真理子)



今年初めて、スタジオで家族写真を撮ることになりました。あこがれの「いとう写真館」が江之子島・フラッグスタジオに出張してくれるようになりましたからです。写真家・伊東俊介さんとモノクロ銀塩ラボ・studio5の勢井正一さんという渋いタグでの写真ができるのを今から楽しみにしています。(企画部門 古谷晃一郎)

大阪府20世紀美術コレクション

1974年から2007年にかけて大阪府が収集した「大阪府20世紀美術コレクション」。総数およそ7900点の中から、enocoスタッフのおすすめ作品を毎号1点ずつご紹介します。

この一点!



「道化者」
前田 藤四郎
(1904-1990)
1934年
43.0×30.5cm
リノカット・銅版凸版・紙

私は前田藤四郎が描く不思議な世界観と、その制作の時代背景に興味を惹かれた。様々な印刷技術、版画技法を組み入れて作品を作るその様はデザイナーの姿に近い。また、前田は海外の雑誌などからもイメージを切り取っており、それが複雑で独特の世界を醸し出している。商業美術家として活躍していた1920~30年代の大坂は「大大阪」と呼ばれ、日本最大の都市となっていた。

この「道化者」という作品にも実験性がある。1つは異なるイメージの組み合わせ。和と西洋が混在している。バックには西洋の写真が切り取られ印刷されている。女性の道化者として描かれているのが江戸における里神楽に用いられた「おかめ」で、ひょっとこと対に用いられることが多い。一見すると西洋の道化者に見えるこの男、よく見ていくとひょっことに見えないこともない。前田はコラージュの技法とともに、柔らかな弾力のある線を表現するために建築材料のリノリウムを版木としたリノカットを用いている。伝統と先端が交錯するモダン都市の風俗が描かれた世界と同様

に、表現手法にも反映されているのかもしれない。前田の作品を通して大大阪モダニズムを回顧し、これからの大坂の姿を思い描いて見るのもいいだろう。



甲賀 雅章
enoco館長

オン★ザ★レビュー

enoco地下1階の古書店、オン・ザ・ブックス米田店長によるブックレビュー。アートブック・写真集・デザイン・建築・ファッションからマンガ・音楽・映画・オカルトまで、多彩なラインナップの中から、今の気分をあらわす1冊をご紹介いただきます。



年鑑日本のグラフィックデザイン'88

真っ赤なルージュがどーんと表紙を飾るデザインの本です。タイトルにあるように、1988年にノミネートされた広告やポスターなどから優秀なデザインを選出。通称「年鑑本」と言われるジャンルの本です。年鑑本は他にもいろいろあって、写真やアートディレクション、タイポグラフィなど、結構細かくジャンル分けして本になっています。でもデザイン関係のお仕事をしていない方には馴染のない本。本屋さんに行けば専門書扱いで、新品の定価は1万超え…なかなか手にとてもらえない本ですが、古本になると1/10以下の投げ売り価格。もともと需要が少ないうえに、過去のデザイン集なので致し方ありません。でも意外と楽しめてしまう年鑑本。ページをめくれば時勢が反映された広告にキャッチコピー。当時は若手、今では大御所、そんなデザイナーさんたちの作品もたくさん載っています。あの頃を懐かしむ気持ちで手に取ってみてはいかがでしょうか。

ON THE BOOKS

営業時間:11:00~20:00(月曜日定休)

掲載の書籍は店頭・オンラインストアで

販売中 www.on-the-books.info



米田 雅明
オン・ザ・ブックス店長

地域情報 ページ area info

このページは、enocoのまわりで活動するみなさんに活動を紹介してもらうページです。
今回は商業・ディスプレイ業界の職能専門集団として、長年に渡りあらゆる空間を手掛けってきた「株式会社スペース」さんに活動を紹介してもらいました。

今号の担当者：「株式会社スペース」さん

株式会社 スペース
SPACE

わたしたちは街のお店や商業施設をつくる
『スペース』という会社です！

みなさんこんにちは。
私たちの働いている会社『SPACE』の紹介を少しだけさせていただきます。
enocoから歩いて5分、阿波座のスーパーLIFEさんの向かいに会社があります。
みなさんが普段、買い物の行く洋服屋さんや食べ物屋さん、スーパーマーケットや
してつくっている会社です。
街に住んでおられる方の毎日の生活に欠かせない『お店』。
日々の『買い物』や『集いの場』が利用する人たちにとってどうあつたら喜んで利用して
もらえるかを一生懸命考えながら、絵を描いたり、図面を引いたりしています。
人・街・環境を創造する商空間創造企業『SPACE』をみなさん覚えてもらえた嬉しいです。



10月28日（土） えのこ de マルシェ vol.11 古書と手仕事にて ワークショップをしよう！となたけど…。

私たちスペースは『商空間を通じて豊かな社会の実現に貢献する』ことを掲げています。
地域社会に対してどういった発信ができるかをみんなで考えていたところ、
enocoの吉原さんにお声をかけていただきワークショップを開催させていただくことになりました。
どんなワークショップをしたら、地域のみなさんに喜んでもらえるのか…。
ワークショップを開催する意味ってなんだろう…。
みんなワークショップの企画なんて初めてです（汗）
みんなでアイデアを出しながら何度もenocoさんと打合せを重ねていきました。



『enoco三丁目建設中！～工事が間に合わない！みんな助けて！enocoタウン～』 ワークショップを開催しました！

地域の交流を通して、お父さん、お母さん、そして未来を担う子どもたちに向け、
これからの地域の『街』の在り方と一緒に考えるとともに、
ものづくりの楽しさやデザインシンキングの重要性を少しでも感じてもらえたたら。.
『モノをつくる』・『デザインを考える』という前に地域のみなさんが楽しく
自分たちの住む街の未来像を描く『きっかけ』に繋がる場になったかと思います！
メンバーみんな、とても楽しく参加させていただきました！
ご来場、ご参加していただいたみなさん、本当にありがとうございました！



こぼれバナシ…

ワークショップの企画とかしたことない、どうするんだ、どうするんだ？
みんな自分の仕事をほったらかして？？（笑）土台つくり、ひたすら木を切ったり、オリジナルエプロン作ったり。ある意味仕事よりも大変でした。
でもこんな取組をしている話を聞いてくれた木工屋さんやアクリル屋さんが『手伝うよ！』と言ってくれて無償で部材をつくってくれたりして、本当に感謝です。
みんなのチカラで開催できたワークショップでした。

ホームページ：<https://www.space-tokyo.co.jp/>



enocoのある大阪市西区江之子島では、
アートやデザインのちからで、くらしをより楽しむための
文化活動「DECODOCO（デコボコ）」が行われています。

www.enokojima.info

ひうち落語会



「ひうち」は桂三度さん、月亭方氣さん、
桂あおばさん、月亭秀都さん、笑福亭笑利さんで結成された、上方落語界ユニット。
毎回大勢のお客様で賑わう楽しい落語会にぜひお越しください。

日時：1月20日（土）

開場18時45分/開演19時15分

料金：前売2000円/当日2300円

会場：フラッグスタジオ

予約：sft.victory@gmail.com

出演：桂三度、月亭方氣、桂あおば、

月亭秀都、笑福亭笑利

「芸術と福祉」分野を レクリエーションから編み直す 中間報告会



2017年度よりスタートしたプロジェクトの中間報告会。「集落／方言」をリサーチのためのキーワードとして、「芸術」と「福祉」、他者と他者が、いかに関われるのか共有する会となります。

日時：3月11日（日）日中※

料金：自由料金（プロジェクト活動資金として1口500円いただけましたら幸いです。）

会場：フラッグスタジオ

プロジェクト・メンバー：タカハシ'タカカーン'

セイジ（主宰）、振子びじん、秋田光軌、ア

サダワタル（協力者）、池上綾乃、持木永大

助成：おおさか創造千島財団

※当日の開催時間、参加者、内容など詳細はウェブサイトをご覧ください

<http://www.seijitakahashi.net/recreation/>

えのこじまだけて聴ける！
凸凹ラジオ（FM89.2）も放送中！

www.enokojima.info/radio



長崎県美術館での展示風景(2017)

その他、卓球教室やヨガ教室など定期講座も開催中。くわしくはFacebookページ、
ならびに、えのこじまの情報サイトwww.enokojima.infoをご確認ください。

